

# 大学生における親和欲求が友人とのつきあい方に及ぼす影響について

1007069

渡辺 竜太

## 【目的】

我々の身近な集団として友人グループが存在する。笠原・島谷（2012）は、中学生を対象とし、親和欲求、対友人不安感情、友人とのつきあい方、友人関係満足度の関連を検討している。親和欲求は青年期において中学校、高校、大学とすべて学校段階で強く持っていることが明らかになっている。しかし、先行研究より友人への不安感情、友人とのつきあい方には、性差と発達差があることが明らかになっているため、中学生と大学生には対友人不安感情や友人とのつきあい方に差が生じると考えられる。本研究では、友人関係で最も基本的な欲求である「親和欲求」に着目し、親和欲求は対友人不安感情に影響を及ぼす、また、対友人不安感情が友人とのつきあい方に影響を及ぼすという友人関係モデルを仮定し、検討する（図1）。また、笠原ら（2012）が行った調査結果と比較するために、中学生と大学生の差、つまり発達差及び性差についても検討する。この2つを本研究の目的とする。

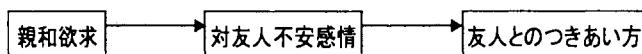


図1 友人関係モデル

本研究にあたり以下の作業仮説をたてた。

1. 大学生において親和欲求は対友人不安感情を高める。
2. 対友人不安感情は友人とのつきあい方において、「気を遣うつきあい方」を強める。
3. 中学生と比較すると大学生では不安感情の抽出因子数がより多くなる。
4. 大学生において男子よりも女子の方が親和欲求が対友人不安感情に与える影響は大きい。

## 【方法】

札幌市の大学生1～2年生147名（男性50名、女性97名）を対象に質問紙法で調査を行った。

質問紙は親和欲求に関する9項目、対友人不安感情に関する18項目、友人とのつきあい方に関する16項目の計43項目から構成される。

## 【結果と考察】

親和欲求は中学生に比べ大学生が低い結果となった。大学生には、単純に一緒に遊ぶことや一緒にいることをのみを求める親和欲求の他に、お互いに尊重しあいたいという気持ちがあるために存在する親和欲求があると推測される。

対友人不安感情尺度の因子分析の結果、笠原ら（2012）の研究では2因子が抽出されたのに対し、本研究では4因子が抽出された。よって仮説3は支持された。また、大学生は中学生よりも対友人不安感情が低かった。学校段階における生活環境が影響していると考えられる。

友人とのつきあい方尺度の因子分析の結果、笠原ら（2012）の研究では4因子が抽出されたのに対し、本研究では5因子が抽出された。「気遣い」以外、内容も異なる因子が抽出されたため、大学生と中学生には友人とのつきあい方に違いがあることが明らかになった。

友人関係モデルを検討するため、重回帰分析によるパス解析を行った結果、親和欲求から対友人不安感情の一部に対する有意なパスが示されたため、仮説1は部分的に支持された。また、対友人不安感情尺度のすべての因子から友人へのつきあい方に対する有意なパスが示され、4つの因子のうち、3つが「気遣い」に対する有意なパスが示されたため、仮説2は支持された。男子と女子を比較すると、先行研究より、親和欲求は男子よりも女子の方が強いことが明らかになっていたことから、親和欲求と強い関連がある対友人不安感情に与える影響も女子の方が大きくなると考えていたが、本研究では示されなかった。よって、仮説4は支持されなかった。

今回の調査では、中学生と大学生の発達差を明らかにしたが、小学校、中学校、高等学校、大学と発達段階的に調査を行うことで、友人関係の構造や特徴をより明確に捉える必要がある。また、理想とする友人関係が異なると、生じる欲求や不安感情も異なってくるのが推測される。今後はこれらを含め、検討を行う必要がある。（指導教員 豊村 和真 教授）